

仏教史專攻

孟蘭盆会について

中御門 順良

(一)

孟蘭盆は倒懸という意味の梵語 *avaLambana* から転化したウランバナ *Ullambana* の音訳で、インド農耕社会に広くみられる祖先崇拜に発したものである。そこで望月氏はウランバナ *Ullambana* であると云い、高楠氏はウルンバナ *Ullumpana* といっているが、慧琳音義が誤つてこれをウランバナ *Ullambana* とした。ウランバナ *Ullambana* は懸空とか倒懸とか云う意味である。ウルンバナ *Ullumpana* は特殊の仏教語である為に慧琳は誤つたのである。懸空は行の意味をも為さない。ウルンバナ *Ullumpana* の語はパーリ語南伝仏教では通用せら

れ、梵語にも名義大集にこの語はあるから間違はない。これは祖先供養の儀礼でもあり、同情救済の儀式でもあると高楠氏は述べているが、結局孟蘭盆とはウルンバナ *Ullumpana* という意味が最適している。

孟蘭盆經に曰く。

大目乾(憊)連始得六通。欲度父母乳哺之恩。即以道眼觀視世間。見其亡母生餓鬼中。不見餓食皮骨連立。目連悲哀。即鉢盛飯往餉其母。母得鉢飯。便以左手障鉢右手搏飯食米入口化、成火炭。遂不得食。目連大叫悲号啼泣。時還白仏。具陳如此(中略)仏言。大善快問。我正欲說。汝今復問。善男子。若有比丘比丘尼。國王太子王子大臣宰相。三公百官万民庶人。行孝慈者。皆応為所生現在父母。過去七世父母。於七月十五日。仏歡喜日。僧自恣日。以百味餓食安孟蘭盆中。施十方自恣日。と、これを孟蘭盆会の起源とする。

(二)

印度、西域に於ける孟蘭盆会については、大唐西域記や南海寄帰内法伝等に見えていないから、支那側の資料

では明らかにすることが出来ないものでそのことを知るために、一切経音義卷三十四によると孟蘭盆の説明に

案西国法 云

といつてゐるから、印度、西域でも実際に行われた。また中国に於いて仏祖統紀卷三十七に、大同四年（五三八）

梁武帝が

帝幸同泰寺設盂蘭盆齋

と記し、南北朝の頃になると南方でこの孟蘭盆会が設けられたことは荆楚歲時記の七月十五日の条に、

僧尼道俗悉營盆供諸仏

と見えてゐるので明かであると思う。この頃には官民道俗の間に孟蘭盆の行事が修せられていたことを知る。

(三)

我国に於ける孟蘭盆の行事は古くは推古帝十四年（六〇六）に始まつて居り、日本書紀才二十二のその年の条

に、

是の年より初めて寺毎に、四月八日、七月十五日齋を

設けしむ

という記録が見られるが、同じく斉明帝の時代にも行われており、同書才二十六の同天皇三年（六五七）秋七月の条に、

辛丑。杉弥山の像を飛鳥寺の西に作り、且つ孟蘭盆会を設く。

というのが始まりであるだろう。このことについては大和の飛鳥寺の西に須弥山の形を設けて盆会を修行したというが、この須弥山像を作るといふことは今まで孟蘭盆会に關係した上では聞いたことはないと山上氏はいうが、そのことは分らないが恐らくは嚴壇には東西南北中央などに旗まで立てて莊嚴する様なこともあるのだから、このようなことも須弥に關係している結果いわゆる須弥壇の様な物を作つてそれを嚴壇として莊嚴したものである。

此年には鎌子の創した山階寺にでも始めて維摩会を修行したといふことである。当時は仏教の種々の儀式が漸く盛んに赴を始めたから、この盆会も又盛んに行われたが詳しいことは分らない。よつて飛鳥寺とは法興寺のことで蘇我馬子の本願によつて真神原に興立して法興寺又

は元興寺と号つた。これは大和高市郡に在つたもので、大体盆会修行の位置を知る事が出来る。しかしその翌々年には一層盛んに行われたことは、斉明帝五年（六五九）秋七月の条に、

庚寅。群臣に詔して京内の諸寺に於いて、盂蘭盆を勸講し、七世の父母に報ぜしむ

と記している。しかして経講も設齋も盛んに行われ全国にも普及され始めたものである。聖武帝（七二四―七四九）の時に至りその供物を大膳職に於いて備えることになり、以後盂蘭盆会は朝廷に於ける恒例行事となると共に、諸寺に於いても行われることとなつた。平安時代の宮中盂蘭盆会は内蔵寮が御盆供を供え、天皇も礼拝した。また寺院でも、盆会、歓喜会を設け三界万霊を供養する風習がひろく行われている。鎌倉時代に入ると万灯会が行われ、この頃には灯籠をあげて先亡の供養を修し、それが民間にも行われたことを知るのである。室町時代の初めには念仏踊がなされ、これが発展して後に盆踊となる。

(四)

一般では、七月十三日には亡霊此世に来ると称し、家の内外に火を点じてこれを迎え、十四、十五日の両日には屋内に止まるを以て位牌の前に果物、野菜等を供え、また切子灯籠を吊してこれを慰める。或は供物、灯籠の類を墓所におくことがある。十六日の夜は亡霊の再び此世を去る時なれば門外又は河岸に松火を点じてこれを送る。又此時を以て供物灯籠を河に流すことがある。此行事を霊祭又は精霊祭と称し、十三日の野火を迎火、十六日の野火を送り火と称す。所によりては死者がありてのち始めて迎える盆会を新盆といい、十四、十五の両日は檀那寺より僧を請じて読経を営みこれを棚経と称す。十六日の晩は寺社の境内にて老若男女が集つて踊りこれを盆踊と称す。この盂蘭盆会は悪趣に墮せし先亡の苦患を除く為に修するところなれども、浄土真宗にては追善、追福をなさざるが故にこれを歓喜会と称す。日本古来の祖先崇拜の民族精神を生かして家族制度の崩壊されつつある現今に於ては一層よく時代にマツチした方法で益々

五、薩益会を重要視すべきであると考ええる。

北周武帝の廢仏について

若 麻 績 修

支那に於て隋が国土を統一し、引き続いて唐が強大な国家を形成した頃（五八一—七五〇）、印度では見る事の出来ない形式と内容を持った仏教、即ち天台、華嚴、念仏、禪などの様な所謂支那独自の仏教がぞくぞく大成されて、支那に於ける仏教の黄金時代を築いたのである。

常盤大定博士の著を見るに、支那に於ける仏教の歴史的発展について隋唐代（元宗まで）を支那仏教の建設

時代、南北朝代、北周までを（四〇〇—五八〇）、研究時代として展開しておられる様に、隋唐の如き大発展の源泉は政治、思想、軍事共幾多の変遷を重ね、世状が非常ににぎやかであった南北朝代に発するものであり、その直接的契機となつたのは、北周武帝（五六一—五七八）

に依る宗教全廢に発するものと考えられるのである。

塚本善隆博士は著「北周の廢仏」に於て、全十章にわたつてその廢仏の經過をくわしく論述されておられるが、それを要約して、周武をして廢仏に至らしめた根本原因は、一、周礼復古の標榜と強い中華優越の意識に依る外教への輕蔑視乃至拒否の意識感情による廢毀。二、富國強兵（北齊討伐）の爲の廢毀。三、仏教の眞をあやまりゆがめ、墮落している現在教団を廢し、具体的現實に即した眞仏教を具現し顕現する爲の廢毀。であると云われていることがわかれるのである。

私は本論が北周の廢仏について最も事實を教えるものと受け取り、準拠してさらにその前後に於ける廢仏、北魏太武帝（四二四—四五二）、唐武宗（八四三—八四六）、後周世宗（九五四—九五九）、所謂「三武」の「宗の法難」の論拠と比較する事に依つて、北周廢仏の特異性を求めつゝ、支那に於ける仏教受容の歴史的変遷の形態を知ろうとするものである。

一例として、前後の廢仏の詔と北周の廢仏の詔を對比